

一、神樂殿。太神宮の神樂殿也。末社社地に多し。女夫竹。社地に有り。女戯にもあり。天王御輿屋。三基有り。是は九日市・五日市・獵師町、三ヶ所天王の御輿有り。毎年六月十五日、三ヶ所隔年に祭あり。船橋祇園會。九衢充塞祇園會。神轂飄レ風如ニ上龍。魔族歸降三伏夏。寒蟬奏レ樂響ニ高松。青文豹。

一、神主館。從五位下富上總介といふ。社家三四軒有り。

一、御殿跡。九日市の表通り也。昔、東金御成りの節、御小休に御殿を立て、鹽燒百姓を召出さる。御褒美被下しも此御殿にての事也とぞ。

一、淨勝寺。西光山といふ。御朱印、御四代之内。淨土增上寺末。開山賴譽上人。九日市也。明應五丙辰年建立。凡三百十四年に及ぶ。地中三ヶ寺光壽院。宗勝院。千修庵。

一、西福寺。船橋山といふ。真言。開基。凡古き寺也。年代不詳。此近邊十三ヶ寺の本寺也。額、船橋山。佐文筆。文山は玄龍の男也。能書にて朝鮮國の御返翰を被レ命し也。

一、稻荷社。彦左衛門稻荷といふ。土橋東詰にあり。さまぐ奇端あり。異神也。はつ午や掛當てまつる沖の虹。沿洲。

一、西光院

真言 開基

寶光院

真言 開基

善法寺

真言 開基

慈雲寺

禪宗 開基

尺八云々
事談から
は近代世

一、清山寺。虛無僧也。普化禪師の宗紳也。小金一月寺は此宗の觸次也。居住の所を風呂屋ともいふ。又、番所とも云ふ也。惣本寺は洛の三十三間堂の南の門外、池田町妙安寺也。凡尺八の音色は笙、筒音は黃鐘調也。左の手は上、右は下、指遣ひ三十二品有り。歌口の妙、笙と同じこと也と云ふ。

一、學王寺 真言 開基 花藏院 真言 開基 東光寺 真言 開基 不動院 獵師は海應 真言 開基

萬福寺 真言 開基

東福寺 慈明山

真言 開基

一、了源寺。一向宗西末。開基。當寺に時鐘あり。二六時中怠らず。

一、獵師場。九日市の新田也。一村皆漁獵を以て活計とする也。大網小網さまん有り。

一、大鯨。寛政十二申年十一月廿八日、菅沼安十郎様御支配之時、此浦へ寄りたり。御見合之上御拂ひ被仰付。上納代永拾六貫七百五十文差上げ事濟みたり。此節、生鯨を貰ひ食せし也。又、買請負人鹽漬にせしかども、鹽きかず腐りたり。鯨の鹽の漬方、關東にも知る人なしといふ。鯨は四足の魚也。

一、齒黒鮫。大鮫にて人を喰ひ、舟を背負ふの沙汰専ら也。先年貝ヶ濱に於て死す。江戸品川町の蒲鉾屋某買取り、料理しけるに、腹中より觸體九ツ、金子も多く出でたりとぞ。珍しき惡魚也。此鮫死してより濱壹丈餘埋りたりと。云々。

一、鯛。此海にはなし。

一、御菜料。永四貫八百文運上致す事也。九日市に字多し。横町・堅町・陣屋町・天王坊・松原など也、又、五日市の字は神門・宮の内・宮坂・辻・横宿・鳥井戸・川端などあり。

一、大筒稽古場。宮地より東方湊分といふ所也。小宮山様御代官之節、此稽古所、鎌倉七里ヶ濱へ引きたり。此稽古の時は鍋釜等に響きて夥しといひし也。此跡は湊村青山某へ被下。故に湊分の名あり。當時當村某の持に成れり。

一、山野村。高貳百六十石六斗壹升六合。

一、富士淺間社。當村鎮守。一帶の松林也。駿州富士山勸請。別當——。

一、正覺寺。大日山といふ。眞言。開基。

一、伯樂。此村にあり。伯樂とは天馬を司る星の名也。實名を孫陽と稱すとぞ。

一、印内村。高三百五十八石七斗九升三合。外に四石八斗四升。内八斗四升御朱印。

一、妙見社。當村鎮守。千葉妙見勸請。

一、延命寺。深堀山といふ。眞言。開基。

一、光明寺。眞言。開基。

一、葛西三郎重春苗裔。當村田中氏是也。鎌倉葛西ヶ谷は清重の居館の跡也。木戸内といふは印内村の小名也。別村にはあらず。葛西系圖略レ之。今は民間となると雖も、其子孫永續する事珍しき也。

一、重右衛門。印内の重右衛門とて兒童口つぎに残り、専ら噂する事也。然れども、兒童の云々するとは大に相違せり。生得力量有り。又頓才も有り。元、葛西氏の臣下の家にて、良き百姓也けるが、兎角に人を非にするの癖あり。或年、隣家の稻を盜みて公邊に及び、數十日間御咎め被仰付、事相濟みたり。此理合の事面白しと雖も、事長ければ爰に略す。大岡越前守様の時分にて、凡百五十餘年に及ぶ。近年の事のやうにいへど左にあらず。

一、本郷村。高四百五十八石三斗壹升四合。實は栗原の本郷也。栗原七ヶ村といふ。又、八ヶ村ともいふ。

栗原、二俣、山野村、二子、海神、寺内、印内、古作。

右八ヶ村也。今は大抵行徳領となれり。

一、栗原左衛門尉冬詮館。當村に有れども所定かならず。此八ヶ村は栗原氏の領地也。一揆のために所領を失ひ、甲州へ落ちたりと也。故に此村を元は御館村といひし也。云云。

一、満善寺。葛井山といふ。眞言古作妙王院末。開基。

一、葛間田の池。當所の池をいふ。此池は下總の名所にも出でて古き所也。此流下にふたまた二間田といふ所あり。八雲御抄に「かつまたの池ははちすなし」と。又、萬葉集にありとも詠めり。題林抄に「かつまたの池は今は水なし」。云々。

一、景物。柳花、蓮、杜若、鳴、芦、鮎、つれなし草、堤井桶。堤かくれば水もなし。

萬葉集。かつまたの池は我しる蓮なししかいふ君がひげ無きがごと 婦人。

家集。水なしと聞きてふりにしかつまたの池あらたまる五月雨の頃 西行。

是はちすなし水なしと詠めるかつまたの池の談、奇也。されど、何となく水ある鮎の歌も多くありといふ。又、萬葉集のかつまたの歌は、下總國のかつまたには非ずともいへり。

千穀集。池もふり堤崩れて水もなしうべかつまたに鳥もるざらん 肥後。

一、下り所の池。此溜をいふ也。是は昔、日蓮上人房州より佛法のために來り、此池より舟に乗りたりといふ。又、昔は此所より堀江村迄渡し有り。又、鎌倉迄出勤の武士の舟路なりといへり。

孫陽云々
ある訓陽抄に
庭抄に

一、葛飾祠。是一郡の惣社也。通りより二丁ばかり入る。別當滿善寺。祭神瓊杵尊。勸請より千有餘年に及ぶとぞ。地神三代の神也。

一、葛蘿之井。下總勝鹿。鄉隸栗原。神祀瓊杵。地出醴泉。豐姬所鑿。神龍之淵。大旱不涸。湛乎維圓。名曰葛蘿。不絕綿々。文化九年壬申春三月建之。南畠太田草撰。

又、此の名所に、盃の井といふあり。何地なるや未詳。

藻鹽草。東路にさしてこんとは思はねど盃の井に影をうつして

一、寶城寺。茂春山といふ。禪曹洞仙臺贍澤永德寺末。開基智泉和尚。葛西三郎茂春建立。年代不詳。御朱印三十石。此内八石四升は印内村に有り。昔は木戸内にあり。後、此所へ移すといふ。

一、立春大吉。是は禪家の門戸に押す所也。表裏同じ。故に邪氣裏よりも入る事不能と也。

一、成瀬伊豆守直陳墓。高さ壹丈餘。寛永十一年甲戌十月。其外。墓多し。

一、臣下殉死塚三墓。成瀬信濃守正賢墓。寛政十戊午三月。成瀬氏は、尾州様御家老三萬石、成瀬隼人正の家也。故有りて當寺へ葬る。

一、笠椿。堂前にある名木にて、笠を伏せたるが如し。高さ三四尺、四方四五間に渡り、花は小輪赤色也。花無き時も亦見所あり。

一、寺内村。高二百五十一石七升四合。家數凡五十六七戸。

一、當樂寺。馬光山と云ふ。眞言。すべて此邊の村々にて多く真桑瓜・大根・甘藷・里芋等を作りて鬻ぐ事也。

眞桑瓜は秋瓜の事にて、濃洲眞桑村の瓜は上品甘美、故に皆眞桑々々と稱美せしより、秋瓜の惣名と成りたりとぞ。西瓜は寛永中琉球より薩摩へ渡り、慶安の頃長崎へ、寛文・延寶の頃に長崎より大阪に傳へ、京江戸及び此邊にまで弘まりしといふ。香物。江次第裏書にも出で、往古は大根に限る也。大根は口中の臭氣を消す徳あり。故に香物といふ也。云々。南嶺遺稿に見えたり。甘藷。永祿の頃、琉球より薩摩へ渡り、東國へ來るは近年の事也と。暖土の砂地によしといふ。

一、二子村。高三百五十九石壹斗五升九合。

一、東明寺。醫王山といふ。淨土船橋淨滿寺開基。本尊藥師如來。專心僧都作。靈驗は著し。

一、多門寺。寶珠山といふ。日蓮宗小金平賀山本土寺末。開基日傳上人。日傳上人は九老僧の内にて、則ち祖師の御弟子也。毘沙門天、祖師作。此上人の守本尊也。靈驗あり。日傳は延慶四辛亥年寂。凡五百年に及ぶ。此邊にて瓜など多く作りし也。

一、小栗原村。高二百八拾八石九斗壹升。是は小金領也。いま行徳領に成れり。

一、妙圓寺。東照山といふ。日蓮宗。開基。

一、古作村。高百廿六石二斗九合。是は栗原領也。凡家數三十戸。此村、高より繩延びにて畠多し。故に近村の人々當村の地を作るといへり。東方は上山新田・行田新田・藤原新田等の村々也。

一、明王院。不動山といふ。眞言古。末寺五ヶ寺。開基。此寺末寺ありて本寺なし。不動尊。本尊也。靈驗殊勝の尊像也。牡丹。庭前にある大木にて、一株九尺四方に廣がり、高さ七尺許。花は紅にて賤しけれども、花の

數は百に満てりといふ。先年大風に大枝一本折れたりとぞ。芳心照暮春、媚色凝清曉。牡丹は詩には春也。唐土には花王と稱す。又、俳諧には初夏の花の類甚だ少し。牡丹を初夏の花として夏季とするは、これ俳諧の一躰なり。杜若も歌には春なり。俳諧には初夏とするなり。紅梅。是も大小なり。蘇鐵大きなる有り。近年植ゑたり。

一、中山村。高百十一石九斗二升九合。小金領也。

一、法華經寺。正中山といふ。御朱印五十四石壹斗。開基日常上人。上人は眞間日頂上人の實子也。鎌倉の代に家榮えて富木播磨守入道當忠といへり。則ち此地居館なりしを、祖師に歸依有りて御弟子と成り、師と共に宗を弘め、大伽藍建立有りし也。

一、仁王門。額、正中山。光悅筆。

一、黒門。額。如來滅後。閻浮提内。本化菩薩。初轉法輪。法花道場。是も光悅の筆也。しかし、是は寫し也といふ。又、池上にも長榮山・祖師堂・本門寺、此三枚の額光悅筆也。又、身延山にも額有り。本阿彌光悅は能書なる事、萬人の知る所なり。

一、本堂。釋迦如來。祖師堂、十五間四面。什物は小松原御難御衣・富木氏陣貝・御所持巾着・天台真言等の經卷・眞筆の題目、其外數多。毎年七月七日虫干に出す。

一、法華堂。建長六年寅春、祖師と日當の兩僧、錢壹貫文にて建てられしといふ。

一、五重塔。塔高し梢の秋のあらしより 素堂。

一、日蓮上人報書。新麥、たかむな三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と回向いたし候。右は風俗文選にも出でたり。

一、鬼子母神堂。靈驗有り。一代山の高き所に立つ。中山相傳御祈禱本尊也。題正中山。法燈赫耀二尊間。精宇梵音心自閑。花木知時春色顯。黃鶯有感正中山。青文豹。

一、番神堂。三十番神を祭る也。毎年七月十五日には近村の女童集りて、拍子とりく踊り興ずる也。

一、千部。三月八日より十七日迄御影講。十月十五日、中山の祭まつりとて群集せり。

一、鐘。朝七ツ前に撞之。此庵を助宣庵といふ。

一、正中山法華經寺。洪鐘銘曰、諸法從本來。常自寂滅相。佛子行道已。來也得作佛。萬治元戊戌歲。

一、菩薩號。祖師菩薩號は、洛の妙蓮寺より始む。本寺の什寶に雨乞の本尊とて、祖師自筆の法華曼荼羅あり。後光嚴の御時天下大旱す。時に此本尊を桂川邊に致し請雨の法を修す。忽ち大雨數日に及び、叡感ましく、勅して大井の號を賜はるとぞ。先年、妙蓮寺にて此曼荼羅拜見許せし也。又、勢州宇治里光明寺の境内に、日蓮上人の眞跡にて題目石有り。聖人弘徳の爲に兩宮に百ヶ日參詣、七字を刻し給ふとぞ。今の號題目とは大きに異にして、字形全く、筆法備はり、凡筆にあらず。是亦予拜見せし也。

一、役寺四ヶ寺。淨光院。本行德。法宣院。安世院。此外に地中といへるは二十ヶ寺あり。寺號略之。此邊の末寺七十五ヶ寺といふ。江戸觸次、谷中妙法寺也。

一、角力。毎年七月十五日、鬼子母神堂下にて、近邊のもの打寄り興行す。見物群集す。

- 一、下宿。是は中山村也。當山の下通り故に下宿といへり。
- 一、北方村。高二百十九石七斗九升五合。朝比奈清右衛門知行也。
- 一、妙見寺。妙法山といふ。中山末。七面社有り。開基。
- 一、千足。是は北方村の新田也。公儀へは一村に書き上ぐる也。
- 一、妙正社。疱瘡神也。日蓮聖人の祭所にして、妙正明神といひ、諸人婆々神と云ふ。靈験ありとて詣人多し。
- 一、藤原新田。高不詳。家數六十餘戸。
- 一、神明社。當村鎮守。別當、行徳自性院。
- 一、觀世音堂。身代觀世音也。諸人藤原堂といふ。咸世作。應和二年也。凡八百四十八年に及ぶ。西國廿一番穴穂寺本尊と同木同作也。丹州見樹寺より、萬治二己亥年田中三左衛門御普請奉行の節、丹州桂川へ出役して持ち來り、徳願寺へ納めし也。今百五十一年に及ぶ。後三十一年過ぎて當所へ移し奉る也。元祿三庚午年の事なり。是は行徳三十三所の外也。行徳を三度めぐりて、藤原に百觀音と參り納むる也。
- 一、丸山新田。高山畠とも四百石。
- 一、慈眼院。禪。行徳長松寺末。開基。本尊十一面觀音、惠心僧都作。
- 一、蛭子社。是を恵比須といふ。神主、鈴木伊勢。
- 一、中澤村。高四百石。本田様馬の飼料場。當所に牧十一有り。鐵玉薬御免、是大防也。月々六度も野（闕字）有レ之。家數二十三四戸。
- 一、高石神村。諸人深町と云ふ。高二百廿一石八升三合。小金領也。朝比奈清右衛門知行。
- 一、高石神社。當村鎮守也。社地は鬼越村地内也。別當、養福寺。正木大膳亮時綱舍弟正木彈正左衛門の靈を祭る也。
- 一、安房の須祠。當村にあり。里見越前守忠弘男里見長九郎弘次の靈を祭る也。永祿七年正月の軍也。忠弘生年十六歳、勇力にして血戰す。終に松田尾張守に討れし也。古老云ふ、すべて此邊より國府臺迄に小祠の多きは、其頃の勇士戰死の靈を祭るもの多しと。云々。里見軍記に云ふ。永祿七年正月八日合戰。里見義弘・岩槻城主太田三樂齋、鴻の臺に出張し、北條氏康・氏政と戰ひ、正木大膳は手の者僅二十騎ばかりに討ちなされ、前後を見合せ控へたるに、小田原勢四五百騎、短兵急に打つてかゝる。時綱進んで敵兵廿餘人薙ぎ倒し、義弘の跡を慕ひ、上總國へそ落ち行きける。嫡子彈正左衛門は、なほ深入りして戰ふ所に、山角伊豫守虎ひ寄りて無手と組み、兩馬が間に落ち重る。正木左の手を以て山角を取つて押へけるが、馬より落ちざま右の腕を折りしかば、太刀取つて刺すに堪へず。捻ぢ殺さんと思ひけるにや、曳々聲を出し押し付けけるに、下より山角三太刀まで腰の番ひを刺し通し、終に正木を刎ね返し、首を取つて差し揚げたり。云々。
- 一、泰福寺。中山末。開基。
- 一、隆然寺。清光山といふ。中山末。開基。此所釜谷道也。深町・藤原・丸山と續くなり。家數百餘戸。
- 一、鬼越村。高六百七十五石六斗七合。内六百十四石五斗二升壹合。朝比奈彌太郎知行。同六十一石八升六合、朝比奈甚之承知行。當村は小金領也。神明社、別當神明寺・諫訪祠・寄木祠・世直祠・高石神共五社を氏神と

す。鬼越村・八幡町へ定助の人馬出づる也。當宿長さ四百五十六間。

、當開寺。周塚山といふ。中山末。開基、中山三世日祐上人。日當上人一周忌弔ひの靈場也。

、神明寺。眞言。開基。此村名、鬼越といへるも怖しきこと也。何さま由來有る事なるべし。

、八幡町。高三百八拾三石壹斗六升壹合。外に高貳拾石、總寧寺領有り。八幡宿長さ四百七十二間。下總の八幡にて驛場也。旅籠屋四五軒あり。當に人馬往來繁し。舟橋へ二里八丁人_{本輕}行德へ一里八丁人_{本輕}市川へ一里人

、八幡宮。相殿二前。天照大神、春日明神。御朱印五拾石。男山八幡宮勸請。寛平年中勅願所。國家鎮護として日本國中に一社づつ鎮座ましまし、其所をも八幡と號せり。凡九百十餘年に及ぶ。

古記不明
、大鳥居。額、八幡宮。筆者不詳。古記に云ふ、額を掲ぐる事、昔は禁中三十六殿九重の御門、神社は伊勢・石清水、是は天子御自体の社なれば仔細なし。寺院に於ては御祈願所七十二ヶ寺の外は制禁也。勿論、額を掲げぬ所には下馬もなき事也。云々。

、下馬。仁王門前右に札有り。口訣に、下馬札を二字ともいふ。死活の點、板は小さく文字は大に見ゆるが法也。

、樓門。仁王あり。裏は大黒天・毘沙門天也。古記に云ふ、金剛・密迹の像也。必ずしも二像に限るにあらずと雖も、此尊、伽藍守護の誓ひあり。故に惣門の左右に安置して仁王と稱す。云々。

、狛犬。拜殿前左右にあり。神社記に曰ふ、獅子・狛犬、神社に限らず。禁中にもあり。元日の節會・御即位などに、隼人、此狛犬の後にて犬の聲を上げて君を守る事、延喜式にあり。是日本紀にいへる火門降命の苗裔也。此故に神社に立つるも守護の心なり。

、神輿。三基、拜殿にあり。御隨身、拜殿にあり。豐盤間戸命・櫛盤間戸命是也。此拜殿に詩歌連俳の奉納の額數多あり。予若年の頃、俳友の勧めにより、催主となりて發句の額を奉納せし也。今、是を顧みるに、我句の拙きを後悔致す也。

、大銀杏。本社の側に有る神木也。大さ牛も隠すばかり也。

、箇粥神事。正月十五日、神事也。此粥占を聞きて、農家作り物の熟不熟、并に、天氣の善惡を知る也。

、祭禮。八月十五日十六日也。國中第一の大市にして、吳服屋を始め麻苧・古着屋、并に小道具・小間物、其外萬の諸商人、二通り三通りに假の見世店をしつらへ、鬻ぐ事誠に喧し。貴賤老若男女の參詣限りもなく、八幡祭とて世に名高し。生姜、是亦此市の名物とする也。放生會もあり。又、寛政五癸丑年正月十一日、本社西の朽木の根の下より鐘一口掘り出せり。銘左に。

敬奉治鑄銅鐘分。指渡二尺一寸。

大日本國 東州下總 第一鎮守 葛飴八幡 是大菩薩 傳聞寛平 宇多天皇 勅願社壇 建久以來 右大將軍

崇敬殊勝 天長地久 前横亘海 後連遠村 魚虫性動 鬼鐘曉聲 人獸眠覺 金磬夜響 永除煩惱 能證菩提

元享元年辛酉十二月十七日。願主右衛門尉丸子眞吉。別當法印知圓。

予も拜見致せしに、いかにも古きもの也。此年號より是迄の年數四百八十九年に及びし也。是は、其時代此邊を領せし武家の寄進なるべし。

、法漸寺。八幡山といふ。別當也。天台本睿山末。鈴木右膳、神主也。

成田の圖は
國會にあ

一、八幡不知森。諸國に聞えて名高き社也。魔所也といふ。又、平將門の影人形、此所へ埋めてありともいふ。又、日本武尊東征の時、八陣を鋪き給ふ跡とも云ふ。其外説々多し。予、古老に委しく尋ね聞きけるに、此所昔假遷宮の神也。故に敬して注連を引き、猥に入る事を禁す。不淨を忌む心也。昔は今の街道にあらず。古八幡に中山道といふ字有り。其所街道にて、宮居も其所に北向にてあり。國初様御通行の砌、此街道を開く。并に宮居も今の所に遷し、大杜に造營有り。云々。此杜の地所、今は本行徳村の同地内に成りたり。八幡三不思議、杜、一夜銀杏、馬蹄石、是を云ふ。

一、東昌寺。淺間山といふ。禪宗栗原寶成寺末。開基。

一、梨子。八幡梨子とて名物也。近年、他の村々にも夥しく梨子を植ゑて江戸へ出す也。其植ゑ始めし人は、此村の川上氏也。甲府・濃州などへ立越え、最上の梨子の種を得て歸り、接穗してより段々諸村へ弘まりしといふ。經濟に賢き人也。或人云ふ、梨子・林檎の類は、人家近く食烟かゝらざれば、實を結ぶ事薄しと。云々。左鞍梨花。冷艶全欺雪。餘香乍入レ衣。春風且莫レ定。吹向玉階飛。丘爲。枕草紙に云ふ、梨の花、よにすさまじく怪しきものにて、云々。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たゞへにいふも、げに其色より初めて愛なく見ゆるを、唐土に云々。楊貴妃の御門の御使にあひて泣きける顔に譬へて、梨花一枝帶レ雨。云々。

一、孝子。此梨子を始めたる川上何某は、貞實にして孝子也。先年中川飛驒守様御通行の砌、御聞きに及び、御褒美を被下置し也。元は貧也と雖も、今は富貴也。

一、古八幡村。高四十五石壹斗二升九合。小金領也。

- 一、八幡村。昔は、此所往還にして街道也とぞ。
- 一、平田村。高五十八石壹斗九合。家數凡四十餘戸。宿長さ四百廿間。
- 一、諏訪社。當村鎮守。別當神主ともいふ事なく、村中惣持也。祭神は信州諏訪勸請。健御名方命。八坂刀賣命、則大己貴命の御子也。此神の氏子は獸肉を喰ふ事を穢とせず。
- 一、菅野村。高五百石六斗四升四合。小金領也。家數八十餘戸。
- 一、白旗社。當村鎮守。武内宿禰を祭る。別當、不動院。
- 一、不動院。山王山といふ。眞言。開基。本尊、不動尊。靈験也とぞ。當村の邊は早稻地にて、茄子瓜等至りて早く出來、江戸へ出す事也。
- 一、繩。農業の暇に酒醤油鹽問屋等の詰繩を掏りて鬻ぐ事也。
- 一、宮久保村。高四百一。當村名主、貝塚村より兼帶也。
- 一、春日社。當村鎮守。別當。家數凡四十餘戸。
- 一、天神祠。古き祠也とぞ。往古、左遷人の守本尊なりきとぞ。別當。
- 一、善福寺。開基。
- 一、養福寺。開基。
- 一、袖掛松。往古、都人左遷の地也と。
- 一、貝塚村。高二百八石九斗三合。小金領也。

(教信の事
安國寺分村
起に詳)
縁

一、高塚村。高八百九拾五石七斗七升四合。同領也。

一、曾谷村。高六百七拾石。家數八十餘戸。

一、安國寺。曾谷山と云ふ。中山末高席。開基日禮上人。

一、曾谷次郎教信城趾。則ち此寺地也。鎌倉北條時賴卿の時の大名也。祖師日蓮上人弘法の爲、房州より鎌倉へ赴き給ふ時、曾谷殿の館に入り、暫く逗留、教信深く信じ、弟子となり、日禮と云ふ。此時、祖師の面前にて御影を刻む。則ち體の内に祖師髮爪を納む。此像いま同國鹽古村法宣寺の祖師是也。開山日祝は教信の末也。千葉一族也といぶ。

一、妙見尊。城主教信靈夢を蒙り、勸請有り。靈驗奇端、世の人知る所也。

一、菅家祠。古き祠也。

一、王羲之祠。菅神祠の隣。延享元子四月、出家鳥石先生勸請也。神像は唐土より傳へ来るといふ。書家の祭る所、尤もなるべし。

一、石額。晋右軍王公廟。鳥石筆。鳥居等は寛政辛亥暴風に破倒せし也。碑。王公神像記。朝敬大夫藤原檀撰。延享改元夏四月。

一、鳥石。城主曾谷殿の愛石也といふ。此石いま江戸品川鈴ヶ森八幡にあり。是は鳥石先生乞ひ受けて八幡へ納めしといふ。其石を拜見せしに、大き三尺ばかり、石面五寸ばかりにして鳥の形容あり。石色青く、鳥形は眞黒也。石の左の肩に篆書にて銘有る也。文、南郭。書、鳥石。

一、溜。曾谷池といふ是也。先年蓴菜を植ゑ付けしに、年々殖え廣がるといふ。

一、須和田村。高百三十七石八斗貳升四合。家數凡三十餘戸。

一、六所社。當村鎮守。御朱印拾石。神主桑原和泉。社は眞間の北の方也。下總國惣社府中宮也。唯一宗源の神也也。祭神大己貴命・伊弉冊尊・素戔鳴尊・大宮賣尊・右普農尊・瓊々杵尊、已上六所也。景行帝四十一年五月五日、凡千七百年に及ぶ。當國第一の古跡なり。神職の家も、往古より今に到り連綿たるは珍しき事也。往古は御代々帝都より御造立あり。其後、將軍家御建立也。慶長十九年甲寅年大阪御陣の前に、神君御參詣あり。本社拜殿悉く御建立有りし也。

一、東學院。須田山と云ふ。眞言國分寺末。開基、桑原播磨守井に山宥持。天平九年建立。是東學院宿寺也。高野大師入定より三十八年前也。凡千七十三年に及ぶ古跡也。十一面觀音本尊也。行基菩薩作。神木大銀杏。

一、菅原。すばだ菅原には蛇の住むとて、昔より兒女の言ひ傳へたり。

一、東光寺。日蓮宗真間末。開基、日祝知性院。元和元乙卯年建立。

一、國分寺。高七百七十八石九斗九合。小金領也。眞間より十町南の方也。

一、金光明寺。國分山といふ。眞言。御朱印拾五石貳斗。開基、行基菩薩。凡千百年にも及ぶ。文武帝勅願所。本尊藥師如來。行基菩薩作。靈驗の尊像也。

一、題國分寺。草創聖武皇。國分寺靈場。啼鳥深林裏。開花內苑香。幽燈千古影。殘照一尊光。密法相承傳。舊蹟輝總陽。文豹。

一、鐘。大檀那、北條相模守入道平時頼。建長八年夏五月。惜しむべし、此鐘、中頃の住僧小さしとて鑄直し、潰したりと。愚の愚なるもの也。

一、樓門。古佛多し。千歳の面容尊し。中門二ヶ所、其外諸堂有り。奇麗なる事也。

一、役寺三ヶ寺。龍珠院・一條院・寶珠院、他所寺等あはせて廿ヶ寺有りとぞ。往古、聖武天皇勅願にて大日本六十餘州に國分寺御建立有りしと。今、諸國に有レ之也。

一、笠鳳寺。禪宗總寧寺末。開基。

一、經王寺。日蓮末。開基。

一、國分五郎胤道城趾。千葉氏也。東鑑曰、國分五郎胤道、兄弟三人、父當胤、共二河守屬、攝津國一谷至。云々。古池あり、曾谷の池と云ふ。蓴菜、此地より多く出づる也。千年を経たる池にあらねば蓴菜は生ぜざるもの也といふ。當村の長左衛門といふ者の家は古き家也と。日道遷化の時、日頂此家にて碁を打ちて居られ、遷化に逢はずといふ。故に勘氣ありしと也。又、國分寺とて外に小庵あり。昔は大寺なれども、兵亂度々にて寺領も掠められ、今に及ぶと。元祿年中御繩入りの時、除地五畝下されしと也。開基行基也。

一、泣石。是は松戸道用水の流れにあり。國分寺は此道より東の方に見ゆ。水中に小さく見ゆる石也。活き石にて、昔より大きく成りしといふ。地底より出でて有りと。又、國分寺村高の内三千石、大久保大隅守知行也。百六十七石九斗三升二合、鶴殿新三郎知行也。

一、大町村。高千十九石八升。小金領也。

一、大野村。高千百五十三石。稻越村より半道ばかり有り。城跡・御門・殿臺など字多し。追て委しく尋ねて可書也。（予、先年、米買出しの時、此邊を歩行しけれども寸暇なく、委しく不レ尋は殘念也）

一、市川村。高八百九十九石六斗五升五合。内四十石、大久保大隅守知行所。家數凡二百餘戸。すべて此邊は昔の府中也。今も佐倉街道にて繁昌也。毎月二七に市あり。上中下と三丁に分る。寒室、大例裏通りをいふ。此所は眞間の地内也。

一、第六天社。當所鎮守。祭禮九月十九日。本祭には家臺三組、花車など出で、甚だ花麗にて賑ふと也。別當、極樂寺。祭神、面足惶根尊是也。天神第六の神也。故に第六天神と云ふ。又、佛說には摩訶修羅王也といへり。一、極樂寺。西照山といふ。眞言善養寺末。開基用慶法印。永正二乙丑年建立。凡三百五年に及ぶ。御除地壹反九畝三步。

一、觀音寺。天宮山といふ。眞言國分寺末。開基譽賢。御除地壹反六畝四步。康安二壬寅年建立。凡四百四十八年に及ぶ。本尊觀音、惠心作。靈驗也。

一、安國院。玄授院。此二ヶ寺は眞間院家也。

一、市川兵部少輔館。小田原北條氏政の臣下にて、武勇の譽有り。跡不レ詳。

一、古代茶屋。中屋某方にあり。先年、眞間川浚への時、掘り出せし也。

一、根本寺。國分寺末。開基有廣法印。應永四丁丑年建立。凡四百二十三年に及ぶ。

一、下總國府。國分寺より此邊迄也。是昔の國府也。東鑑曰、治承四年九月十七日、武衛不レ待廣當參入、令レ向

康安平十年
七年とす
べきで
利下にあ
ひたの勢
康安をため
て用め
らう

下總國一給。千葉介當胤、相_二真子息六人、參_二會于下總國。廿八日、遣_二御使_一被_レ召_二江戸太郎重長。廿九日、昨日雖_レ被_レ遣_二御書_一不_レ參間、被_レ遣_二中四郎惟重於_二葛西三郎清重之許。十月二日濟_二太井川_一利根_二隅田兩河_一精兵及_二三萬餘騎。下略。當村新溜は享保十一年末出來、長さ廿八間、東西平均九間、深さ五尺、塙長三尺横九尺、馬踏四尺。

一、笠塚。田畠の字にあり。昔は笠塚千軒とて、繁昌の地也といふ。

一、舊家能勢氏。御入國以來の名主職にて、今に至り改めず。永續すること珍しき也。御關所役人の内也。苗字帶刀御免也。

一、鵠王社。市川根本の鎮守也。日本武尊東征の節、祭る所也。舊記曰、鵠岱_{俗云白鳥}人皇十二代景行天皇四十年、皇子小碓尊_{日本武尊也}爲_二東征_一、在_二關左_一。下向凱陳時、臨_二太井流_一、不_レ辨_ニ淺深。時無_ニ何地_一、鵠飛來、渡_ニ淺瀬、垂翼奉_レ向_ニ尊。尊感喜、此山與_レ汝、長可_レ爲_ニ住處_一旨、宣旨。云云。此邊に深草庵などいへるありて、西上人の古跡などいへど、不_レ詳。

一、市川新田。宿長さ四百五十八間。高八十壹石七斗七升八合。名主繁右衛門。家數三十軒ばかり。

一、長榮寺。日蓮宗真間末。開基日順。寛永六年建。御除地二反四畝步。

一、第六天社。祭神前に記す。祭禮九月十九日。

一、石地藏。高壹丈二尺、明暦元乙未年建つ。施主田中氏。凡百五十五年に及ぶ。

一、浪人墓。腹切地藏といふ。凡三十年前五月廿五日、吉良浪人此所にて切腹す。何人が塚へ願を掛け初める

や、靈驗有りと。諸人歩みを運ぶ事也。毎年七月廿五日には草角力有りて賑へり。地藏堂、此所にあり。德願寺持也。此村、田中氏草創也とぞ。

一、眞間村。高三拾石。是は弘徳寺御朱印也。市川村の内也。

一、弘法寺。眞間山といふ。日蓮宗中興開山日頂上人。是も中山開基日常上人の男にて、則ち六老僧の其一人也。元開山と申すは弘法大師此地に錫を留め開基あり。嗣法して古義山伏派にて星霜を経たり。中山草創の砌、日蓮聖人に歸依し、宗を改めて法華と成る。又、眞言の密法を日蓮に傳へし故に、當山と中山は法華の祈禱を専らとする事也。下馬大門の松並木凡七八丁有り。

一、繼橋。並木を過ぎて少しの川に渡す。凡二三間の橋なりしが、高名の橋也。鈴木長頼銘有り。碑橋の側にあり。繼橋興廢。維文維橋。詞林千歳。萬葉不_レ凋。

新勅撰。かつしかの昔のままの繼橋を忘れず渡る春霞哉 大僧正慈鎮。

風雅集。五月雨に越え行く浪はかつしかやかすみにかかるままの繼橋 雅經。

千載集旋頭歌に、源仲正下總國の守に任じけるが、任はてゝ上りたりけるに、源俊賴朝臣に遣しける歌に、東路の八重の霞を分け來ても君に逢はねばなほ隔てたる心地こそそれと有り。返しに源俊賴朝臣、かき絶えし眞間の繼橋ふみ見れば隔てたる霞も晴れて向へるがごと。

夢ならで又や通はん白露の置き別れにし眞間の繼はし 土御門院御製。

みな人を渡しはてんとせし程に我身はもとのまゝの繼橋 日蓮聖人。

東路をけさ立ちくれば勝鹿や真間の繼橋霞はれたり 曾我五郎。

一、眞間井。手兒名祠の奥山陰龜井坊の側清水の井也。清冷にして寒暑無増減。銘に曰く、瓶甕可レ汲。固志何傾。嗚呼節婦。與レ水冽清。と。人渴を凌ぐに足れり。淺々たる清泉境に似るといふ、梅聖愈が詩の心に近し。

玉葉集。かつしかのまゝの井筒の影ばかりさらぬ思ひの跡を戀ひつゝ 光明峯寺入道攝政。

一、手兒名社。手兒名の靈を祭る。石階の下東の方へ入る也。千七百餘年に及ぶ。清輔の奥義抄に云ふ。下つふさの國かつしかの眞間の井に水をくむ女、その姿たへにて月を望むが如く、花の咲くが如し。見る人懸想すること、夏の蟲の火に入るが如く、湊に船の入るが如し。此女、思ひあつかひ、其身を水に投ぐ。云々。

萬葉集。かつしかの眞間の入江に打なびく玉藻刈りけんてこなしそ思ふ 山部赤人。

同集。我もみつ人にもつげん葛飾の眞間の手兒名が奥つきどころ 同。

一、眞間の於須比。麓に有り。東より西へ流る。市川へ落ち入る小川也。

於須比は
磯部の東
語である

萬葉集。かつしかのままの手兒名がありしかばまゝのおすひに浪もとどろに。

おすひとはをそひ也。傍にと云ふことぞ。往古は此山の麓より皆浦也といへり。蒼海變而成桑田と、宜也。

萬葉集。葛飾のまゝの浦まを漕ぐ舟の舟人さわぐ浪たつらしも

一、鈴木院。眞間井に隣る。御大工鈴木修理の寺也。

一、石階。凡四五十段、みかけ石面結構なる事並びなし。鈴木氏寄進すと也。

一、樓門。仁王有り。額、眞間山と有り。筆者不詳。

一、遍覽亭。中門の南の林の中也。千萬の風光一望に満つ。富士の白嶺遙に見えて、佳景いふばかりなし。先年上様被レ爲御小休。故に御殿といふ也。朗詠集の三千世界眼前盡。十二因縁心裏空。(都良香)の俳あり。

續千載。くもりなき影もかはらぬ昔見しまゝの入江の秋の夜の月 爲教。

海東遍覽亭。萬里柳條青。幽徑響二人語。後堂誦佛經。松風和似瑟。花雨猶振鈴。孤月眞間滿。望深比洞庭。青文豹。

一、楓。上覽紅葉と高札有り。享保の砌、上覽有り。此楓凡千年の老樹也とぞ。幹二抱に餘り、枝に枝、葉に葉を重ねて、高さ四五丈、徑六七丈にはびこり、二葉の紅葉とて比類なき名木也。常に風騒の客多し。凡、諸木葉紅する中に、楓は名をいはずして紅葉と稱せらるるは、紅葉勝る故也。櫻といはず花と云ふが如し。

題眞間山紅葉。相從賓客葉楓下。詩賦共吟一酒徒。煙草千尋薰寶地。惣教名木只無朽。青文豹。

一、本堂。本尊釋迦如來、實は藥師如來にて、弘法大師の作也。法華宗に成りし時、日蓮聖人開眼有りて、釋迦如來と唱へ初めたりと。祖師堂は本堂の隣。

一、松平大和守様墓。本堂の側にあり。川越の城主十五萬石の大守の墳也。

一、鈴木近江像。庫裏にあり。官家御大工にて法華宗當寺を信仰有り。石階は日光御普請の殘石を寄附せらる。

一、庫裏方丈。壹丁程西へ入る。什物は法螺貝・劍・大黒天(油師)作。陳札・題目等多し。

一、撫虎。唐畫無名也。上様御成りの節、偏覽亭に懸けしを御賞美、撫で給ひ、活けるやう也と上意有りしより斯く號する也。

元和内
寛文三
年移る
に年今
の地三
移年

- 一、論田。當山の後の作場、松戸と市川との事也。上人取扱ひて漸く事濟む。今に昔語り也。地中十ヶ寺有り。
 一、國府臺村。高百廿八石五斗。總寧寺御朱印也。日本禪宗寺一萬七百ヶ寺有りといふ。
 一、總寧寺。安國山と云ふ。禪曹洞。開基通幻和尚。凡四百六十七年に及ぶ。關東總錄司三ヶ寺の内也。所謂る三ヶ寺は、下野富田大中寺・武州川越龍穩寺・當寺、是也。

一、道灌棲。大門並木にあり。文明年中太田道灌植ゑしといふ。太田道灌は文武二道の名將也。無實の難にて文明十八丙午年七月、高見原に戦死すといふ也。

一、大門額。安國山。台德院様御眞翰。下馬石。大門前に有り。鳳凰坂。大門入口の坂を云ふ。本堂左右に回廊有り。其外院堂多し。當寺、昔は近江の國にあり。天正三乙亥年北條氏政下總關宿へ移し、其後此所に移す。

一、古城跡。享保の初め上覽の所也。總寧寺の後の山也。天明十一年七月、總州一揆、原扇ヶ谷に叛し、臼井城主立籠る。よつて太田道灌發言して此地に繩張りし、築いて向城となし、一揆を亡す。要害堅固の地也。道灌

凱陣の歌に、武士の軍のにはにかつしかや花はこゝろの眞間の繼橋。

一、石棺。山上にあり。土に埋る。是を石の唐櫃とて、以前器物など此中より出でたりといへど、さにあらず。棺槨なるべしと或いへり。又、床几坂などといふ所あり。里見家と北條家と兩度の大合戦あり。然れども城攻めにあらず。平場の合戦也。此邊より八幡鬼越の邊迄の間にて軍あり。前の軍は天文七年十月五日也。北條軍記に曰く、生實の御所義明威勢廣大にして、古河公方晴氏公より、義明を追討すべきよし氏綱へ御頼み有り。中略。義明聞いて急ぎ中途に馳せ廻りて防ぐべしと、弟基頼并に御曹子を大將とし、里見義堯を副將として

安房・上総の軍兵を催し、同國鶴の臺に陣を張り、市川を前に當て待ちかけたり。下略。後の合戦は永祿六年癸亥正月七日八日の事也。北條軍記に曰く、北條氏康・氏政は、遠山丹波守・富永四郎左衛門を先陣として、伊豆・相模・武藏の軍勢を率し鶴の臺へ押向ふ。房州勢は敵を難所へ引請けん爲、鶴の臺の中段に備へたり。去る程に、遠山・富永、鬨の聲を揚ぐると同じく喚き叫んで攻め登る。房州勢は敵を思ふ難所へ引き寄せたり。正木大膳真先に進み、惣手を亂し切つてかゝる。小田原勢追ひ立てられ、坂中に足を立てかねたり。中略。又、古戰記三考に曰く、正月初め三樂齋・康資、相共に總州葛飾郡國府臺へ出張し、利根川・鬼怒川の落合なる市川の渡りを前に當て、眞間の幽林を抱へに、江戸の城を西南に見なし、旗馬印堂々と並べて寄手遅しと待ち懸けたりしに、房源の軍勢は里見左馬頭義弘を大將として、中略。以下凡三千餘人、堂々として備へたり。房源・岩槻の兩勢國府臺に出張の由、南方へ相聞えければ、氏康軍議して、中略。爰に江戸の遠山丹波守直景・葛西の富永次郎左衛門政家は、中略。在り合ふ人數を引率し、遠山直景は行徳を押して行く。富永政家は小松川川邊迄驅け出でたり。中略。去る程に遠山・富永は綱成が返答にて勇み進み向ひけるが、是ぞ最期の軍とは後にぞ思ひ合されける。中略。惣じて此日の戦ひに、北條家へ討取る首五千三百廿餘級、里見家へ討取る首數三千七百六十餘級也。其外、手負双方に夥し。凡、里見義弘の如き、又、太田資政の如きは、智勇といひ、武略といひ、斯くばかり敵に不意を襲はるべき人傑に非れども、極運の致す所にて、是非も無き事也。云々。

一、國府臺。國分臺・鶴岱とも書く。又、往古の眞土山は此山也とも云ふ。國府の字、昔より一音にてこふと讀むこと法也。安國古禪林。

山高渭水深。昔年合戰地。詞客一偈心。

一、鐘ヶ淵。此峠下にあり。こゝに舟橋の古寺の鐘あり。兵亂の時持ち來り、陣鐘とせしを、城跡崩れし時に此所へ落ち、埋れしといふ。

風さそふ鐘ヶ淵とや水満ちてかんくと照る冬の夜の月 東丸。

此山上より見渡せば、刀禰川の流、曝布を引くが如く、富士の高根も眼前にて、葛西の田園、何萬石と限りもなし。一眸の中に東の日枝も見え渡り、此方には筑波根のこのもかのものなど、眺望筆舌に絶ゆ。

一、阿取防神。歌林良材集に云く、下總國阿取ばの宮と申す社は、神の誓ひにて、小柴をたてゝいのるること有り。云々。萬葉集、帳丁若麻績部諸人、

庭中の阿須波の神に小柴さしあれは祝はん歸りくまでに

此神は下總國に書き載せたれども、何地なるや未詳。此所に記す。

一、上小岩村。高六百八拾壹石七斗五升三合。東葛西の割といふ。

一、御關所。御代官支配之武具と、女は手形なれば通さず。嚴重なること相州の箱根・遠州の今切の關所の如し。

一、舟渡し。市川の渡しと云へば、市川方に越す也。

一、下小岩村。高千貳百七拾壹石四斗七升五合。

一、善養寺。眞言新義。御朱印拾石。此寺は此近邊にての本寺也。境内廣し。日本眞言寺壹萬十八ヶ寺といふ。

一、不動尊。護摩堂の本尊也。靈驗あり。弘法大師作。毎年八月廿八日祭とて、草角力有り。

一、笹ヶ崎村。高百九拾貳石七斗三升七合。外に御用萱野壹町九反廿八步、見取田壹丁九反八畝拾五步、草錢場三丁六反歩。堤、今は流作場になり。

一、上篠崎村。高三百石。松浦造酒之亟殿知行所也。

一、富士淺間社。當所上下の產土神也。富士淺間勸請也。祭神木花開耶姬。毎年六月朔祭る。別當無量寺。

一、下篠崎村。高四百五拾石。本田清兵衛殿知行所也。

一、無量寺。御朱印三石四斗。開基。

一、笊筵。上下の篠崎にて、農閑に笊を作り筵を織りて活計を助く。篠崎ざる・篠崎筵とて名物也。甚だ強し。

一、上鎌田村。高五百五拾七石八斗九升九合。外に畑三町二反二畝廿四歩。是は江戸川通り堤外流作場也。子年二月中、堀口荒四郎殿懸りにて御檢地に成る。下鎌田村。高六百八拾壹石七斗九升三合。

一、長壽院。眞言。開基。西光寺。眞言。開基。

一、伊勢屋村。高四十六石六升九合。前野村。高八十三石九斗壹升貳合。

一、太子堂。境内にあり。二月廿二日、太子祭とて參詣群集する也。江戸より諸職人參詣致す也。是は上宮太子と申せるは、諸職の道を下民へ教へ給ひければ也。親鸞堂。御自作眞影座。但、御頭のみ御自作也。

一、上今井村。高三百拾四石七升四合。

一、牛頭天王社。當村鎮守。尾州津島同神勸請也。別當金藏寺。祭神素戔鳴尊は日神御舍弟也。是疫病除の御神也。日本紀略に云ふ、祇園牛頭天王と云ふは、素戔鳴尊の御所行惡しきにより、諸神に逐はれ給ひ、新羅國に

素戔鳴御神の日新神用本何明るま茂記事代本梨羅事に尊居戸に略は尊
記した部誤歌の書も紀ほす曾卷事に古にかと居戸に正でて殆文引いは欽あ居戸に略は尊

至り、牛頭の方と云ふ島に居住なされ、民を從へ居給ひしより稱し奉ると。神代卷及び欽明紀に詳也。

一、金藏寺。寶德山といふ。一本寺也。開基。

一、香取社。祭神下總國香取同神。別當圓照寺。

一、圓照寺。眞言。開基。

一、淨興寺。淨土宗。一本寺也。開基。

一、下今井村。高百六拾五石八斗五合。

一、熊野社。川邊にあり。此下は深き淵也。

一、葛西菁。菜ともいふ。此邊より小松川其外村々にて作り、毎日江戸へ鬻ぐ事也。かさいなとて名産也。上方にも此邊の如きの風味の菜は無しと也。すでに、椀屋久兵衛上方へ取上せて、人にも振舞ひ賞せしめしと也。

又、行徳領川附の村々の作る所の菜、葛西菜にもまさりて甚だ味よし。凡、菜は異國にも日本の如きの風味はないしと。斯くの如く、京大坂にもなく、唐にもなしとあれば、これ世界の第一也。菘、正字也。

一、葛西鮓。是亦葛西彌右衛門とて、江戸鮓屋にて稱美せらる。米も良く、味よし。實に海内第一也とぞ。

葛飾誌略(終)

佐倉風土記

【解説】本書は磯邊昌言の撰、享保七年(一七三八年)稿とある。昌言は佐倉藩の儒臣で、元祿末年稻葉正通佐倉藩主となつた時、封域風土誌編纂の命を受けて完稿復命したのが本書である。漢文地誌の格式通り、封域・風俗・城廓・郡村・山川等の部門に分け、人物・古蹟に及んでゐる。下總の地誌として蓋し最古のものであらうが、高橋氏の「房總叢書」第二輯にも載せられてあるから割愛した。なほ、本書の誤略を訂正増補して明治時代の現状を加へたものに續篇の「新撰佐倉風土記」が刊行されてゐる。(稻葉)

安房國地名考

【解説】寛政元年(一七四九年)三月に伊勢の國學者秦権丸の輯したもの。古語拾遺・日本書紀・續日本書紀・延喜式・和名類聚抄・東鑑・拾芥抄・萬葉集・廻國雜記等から、安房國名及び安房國の各地地名に關する部分を抄出してある。原本は東京文理科大學所蔵。寫本は千葉縣圖書館にある。(稻葉)

安房國舊跡地名管見

【解説】安房國朝夷郡西原村柏谷八作の撰で、安房國の舊跡、特に神社について里人の語り傳へを記し、間々私見を交へたもの、僅に數葉の寫本(筆者所蔵)である。なほ、別に「安房國名所舊跡考」と題した寫本もある。(稻葉)

房總志料別本

【解説】鶴岡安宅の著。下總部は山川・原野・湖沼・驛渡・地名沿革・社寺・城砦等を記し、安房上總部は見

聞錄及び沿革考を述べてゐる。別に雜記として戰記、附錄として安房村稅志と上總下總の郡鄉雜記が見える。いづれも他と重複してゐるから收錄を見合せた。寫本一部千葉縣圖書館所藏。著者の傳記は第三卷の「房總逸史」にある。(稻葉)

南
總
珍

【解説】本書は、南總に於ける地理・物産・人物・口碑・實事等を記して奇抜な批評を加へたもの。著者渡邊寛は中村國香(「房總志料」著者)の孫で、通稱を増右衛門といつた。なほ、本書は高橋氏の「房總叢書」第二輯に收載されてある。(稻葉)

埴生郡聞見漫錄

【解説】深川元儒の著で、高橋氏の「房總叢書」第二輯に收められてある。本卷の一七六頁に「埴生郡聞見雜記」としてあるが、立野良道寫本の奥書には、「深川元儒ぬし此ほど埴生郡佐坪村若菜氏に旅寓の間 上總地志に關係すべき事跡を見聞にまかせ輯錄し、かつ筆のついでに他郡の事跡もいさゝか書添へし事もあつ。明日は歸府すとて昨夜見せにおこせたれば、岡田謙次と二人して今日の夕方までに寫したはりぬ。云々。弘化二乙巳年三月四日」とある。埴生郡は今のが長生郡の一部である。著者は江戸の人、蘭學を修め、農業に精通してゐたから、本書も物産につき特に注意を拂つてゐる。(稻葉)

記元二千六百年房總叢書第六卷(地誌)
(終)



昭和十六年十一月七日 印刷
昭和十六年十一月十日 発行

(記元二千六百年
房總叢書第六卷)

編行輯者兼

記元二千六百年
房總叢書第六卷

代表者 廿日出逸曉

印刷者

大橋松雄

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

千葉市市場町二番地
千葉縣圖書館内

發行所

記元二千六百年
房總叢書刊行會

振替東京一六八四八四番

